OPINION

米国におけるトリインフルエンザ（ＡＩ）対策と日本におけるケーススタディについての私見⑤

加藤宏光

シミュレーション[1] 鶏ペストタイプのＡＩの場合

新しいスーパーマーケットへの販売開始に備えて、スーパーのバイヤーとの商談を進めるため、東京への出張があり、早朝に家を後にした鶏太は、昨日見た大ヒナの、ＩＢのように思われる呼吸器症状は完全に彼の頭を離れていた。新幹線に乗っている彼の携帯電話がブルブルと彼の胸をたたいたのは、午前八時十五分のことであった。

『誰かな？　こんな時間に』

不審に思いつつ立ち上がって、デッキへと歩きながら携帯電話をオンにした彼の耳に飛び込んだのは、昨日彼が「この鶏群には当面注意を払うように」と注意した、あの少年の叫ぶような声であった。

「社長、すぐ来てください!!」

「そうはいかないよ。今俺は新幹線の中だ。九時半から、☆☆スーパーのバイヤーと商談だから。これからは、作ったものをどう流すかが勝敗を決めるのだからナ」

「それどころじゃないですヨ。昨日の大ヒナ、全部死んじゃうかもしれない!!」

悲鳴を上げるように、大声で怒鳴る彼の言葉を、鶏太はその時は、理解できなかった。

「何のことだ。停電でもあったのか？」

「そんなんじゃないんです。餌をほとんど喰ってないです。みんなぐったりしてるんです」

それを聞いても鶏太には何がなんだか判らない。

「何だって？　もう一度順を追って説明してみろ！」

「俺、昨日の社長の話が気になって、今日はあの鶏舎に一番に入ってみたんです。そしたら…」

「そうしたら？」

鶏太は、その後に続く言葉を想像することが、できなかった。

「そうしたら、あの鶏舎のトリが全然餌を食ってないんです。本当に全然です。鶏舎全体が静かで、ぐったりしてるトリが相当多いんです。あちこちで、ガーガー、キャッキャッ鳴いているのが一杯いて…。社長が昨日言ってた場所を中心にして、死んでるトリが出てるんです」

鶏太の脳裏に稲妻のように走ったイメージがあった。

『まさか！』

必死になって鶏太は湧いてきたそのイメージを振り払った。

「死んでるトリの周囲で、ひどく鳴いてるか？　顔の腫れてるのがいるか？」

苛立ったように、問いかける彼の声は、自然に大きくなっていた。

「そうなんです。死んでるトリのいるケージあたりで、苦しそうに鳴いたり、目の周囲が腫れぼったくなってるのが随分見られます」

鶏太の苛立ちを感じて、少年は口籠りながら答えた。

『やっぱりそうなんだ！』

鶏太の頭には、最近いろいろな専門雑誌に特集されている、鶏インフルエンザ（ＡＩ）の清浄に関する情報が駆け巡った。

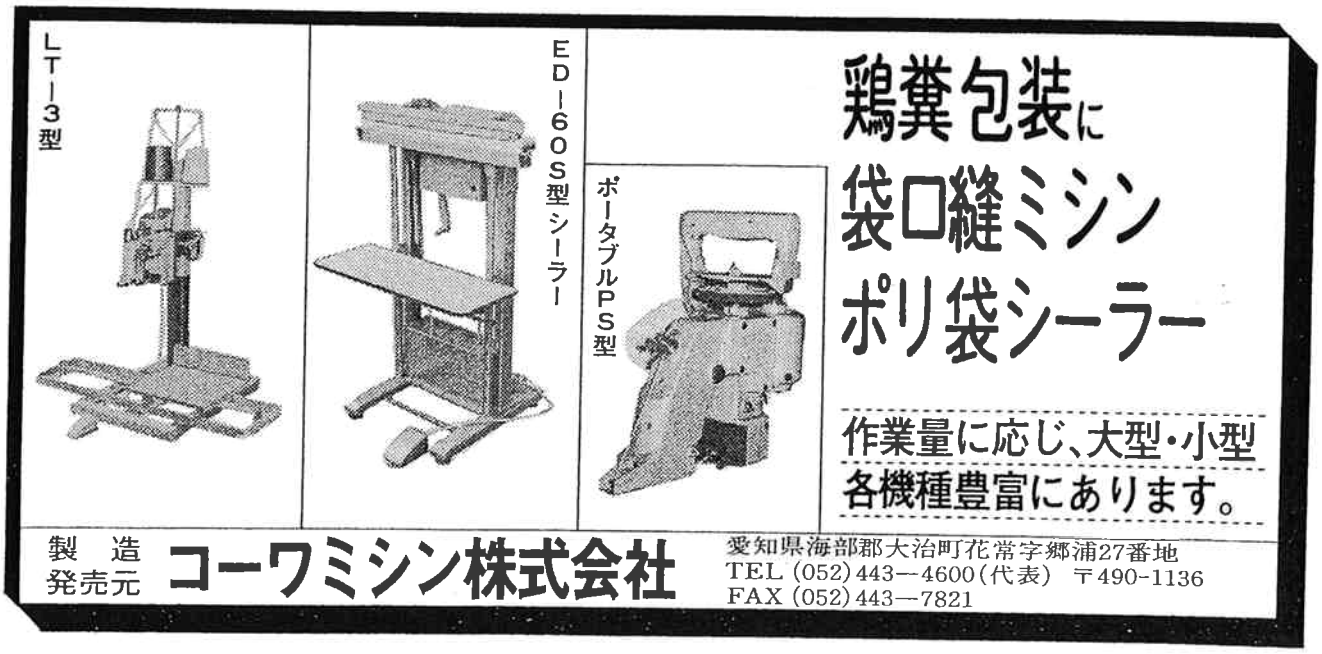
「用事が済んだら、大急ぎで帰るから…」

とはいえ、だからどうしていろ、と指示ができない自分に、どうしようもない苛立ちを感じつつ、彼は電話を切った。少年も具体的な指示を与えられないことに、不安を隠せない様子であったが、それ以上言葉を続けなかった。

『今日のアポは、やっと取れたものだから…』

『今になってこちらの都合で予定を変えるのは、不自然すぎるよな…』
『とりあえず、商談を進めるしか方法はないナ…』
などと乱れる頭で、湧き上がる不安と戦いつつ、これからどうすべきかを考えながら、鶏太は東京で新幹線を降りて、約束のホテルのロビーへと急いだ。

「これがAIなんだ…」
その日の商談でどのような会話がなされたのか、鶏太の記憶に定かに残っていない。商談もそこそこに終えた鶏太はその足で帰りの新幹線に飛び乗った。
新幹線は混み合って座ることもできなかったが、一刻も早く帰りたい鶏太にとっては、立ち席で我慢する一時間半足らずは気にもならなかった。東京からの四時間ばかりの道のりをどのようにして帰りついたのか、彼はよく覚えていない。
帰りついた鶏太は、急いで作業服に着替えて、問題の鶏舎へと急いだ。朝の電話連絡から、八時間ほど経過している。
「社長、お帰りなさい」
五時を過ぎても帰らずに、彼を待っていた少年に優しい声をかけるゆとりもなく、「ああ」とだけ答えた彼は、鶏舎の入り口前に新しく備えられた消毒槽に長靴のまま踏み込んで、鶏舎へと入った。
「朝、電話した時より、随分ひどくなっています」
後について来た少年が言った。
「半日余りで、そんなに病状が変わったか?」
「はい、朝にはこの列あたりはもう少し元気があったんですが…」
少年は、入り口付近の二列を指して説明した。いつもの、餌をねだるような活気のある声は聞かれない。ただ、キャッキャッ、クェークェー、カーカーといった激しい呼吸器症状に伴う、異常呼吸音が騒がしく耳につくのみであった。見渡す限り、どのトリもぐったりし、喘いでいる。そこここに横たわりうずくまっているものは、死んでいるものか。ケージの中で痙攣しているものは、今死につつあるものであろう。
『これがAIなんだ。これがそうなんだ』
心中で呟くものの、実際に彼の口をついて出てくる言葉はなかった。気を取り直した彼は、昨日IBかと思った場所へと重い足を運んだ。
「ひどい!!!」
昨日気付いたその場所を見た彼は、思わず叫んだ。そこには、数羽のつくねんと立っているトリを除いて、ほとんどがうずくまり、あるいは横になっている。
彼の脳裏を『鶏ペスト型と呼ばれる、甚急性の高病原性タイプのAIでは、発症確認後一日で全群が死亡するほどの急性の転機を辿ることがある』と記載されていた、ある雑誌の特集記事の一部がかすめた。
鶏太の養鶏歴には、このような激しい転機をたどる疾病の経験はなかった。昭和四十年当時に大流行したといわれる、高病原性のニューカッスル病が当時の養鶏産業に壊滅的な



被害を与えた――という話は、鶏一郎から聞かされて知ってはいたが、鶏太の経験の中では、ニューカッスル病はあくまでワクチンを実施していないような、不確実な経営方法で飼育されている場合の時に発現してくる、いわば経営責任病のような概念で理解される種類の鶏病であり、その多くは育成期間で数%の減耗をみたとか、産卵率が急に落ちたのがどうもニューカッスル病であったらしい、といった風聞に属するものであった。

彼は、購入する大ヒナについてのワクチネーションを確認するだけでなく、育成時期の抗体計測データを添付することを業者に要求することにしていたし、導入された大ヒナについて、毎月一回の抗体検査を行政の検査機関である家畜保健所に依頼して、確認することにしていた。

これまでの経過では、すべてのロットで十分なNDHI抗体価が確認され、『オイルワクチンになってから、NDHI価はいつも安定している』と、ワクチネーションに対してのある種の信頼を置くようになってきていた。実際この大ヒナの抗体価にしても、導入時にほとんどの例が一二八～二五六倍以上という高い抗体を維持していることを確認してある。常識で考えて、こうした高いニューカッスル病抗体価を持っているトリがニューカッスル病に冒されることは考えられない。

その時、鶏太の養鶏事業家としての本能が働いた。

『AIに対する抗体を持っている鶏群は俺の農場にはないはずだ。だとすれば、隣の鶏舎はどうなる。その他の農場に飼っている三〇万羽はどうなる』

稲妻のようにひらめいた感性で、鶏太は隣の鶏舎へ急いだ。

『見たところ、ここは大丈夫かな！』

そう思った鶏太は、念入りにその鶏舎の通路を歩きながら、呼吸器症状を示しているものを探した。

「やっぱりだめか」

若めすのいる鶏舎側に吸気口を持つこの鶏舎では、ウイルスを取り込まないわけはない。吸気口に近い場所で数羽の開口呼吸を示す例を見つけた彼は、声に出して失望をあらわにした。大ヒナの恐ろしいほどの急性の転機を考えれば、この鶏舎の成鶏群にも明日には、激しい呼吸器症状と死亡する例が現れるのであろう。

「何が起きているんですか？」

急いで自宅へ戻った鶏太は、いつもと違う彼の慌てた様子に、何がなんだかわからなくてうろたえている妻を後目に、風呂場へ飛び込み、シャワーを浴びた。新しいツナギ服に着替えた鶏太は、数キロメートルずつ離れた他の三農場の状況を確認するために、愛用のピックアップバンに乗り込んだ。

幸い、どの農場にも社宅があり、農場の責任者が住み込んでいる。夜遅くはできるだけ訪れないようにしている鶏太が、九時を過ぎようとする頃にいつもと異なった顔つきで訪ねるため、どの場長も面食らった様子で鶏太を迎えた。どの農場でも、『異常を認めた』という報告はない。鶏太は、自分の目で確認したい、とはやる心を抑えてあえて鶏舎には入らずに、農場長たちに注意を与えて回った。

その内容は「本場に入った大ヒナの様子がちょっとおかしいんだ。だから念のため、次のことを守って欲しい。まず、農場間の人の行来をやめること。作業車の共用もだめだ。餌のトラックは、本場を最後にする。どの車も本場に出入りしたら、その後すぐに洗車して消毒すること。部外者の立ち入りはもちろん禁止するから…。これらのことは、俺がよしと言うまでは必ず守って欲しい。農場にはそれぞれのツナギを置いて、朝夕に着替えて、専用の衣服で作業をする習慣も必要だな」というものである。

どの農場の場長も鶏太に同じことを問い返した。

「社長、本場の大ヒナで、何が起きているんですか？」

「よくは分からない。でも、この二、三日で、どんどん様子がおかしくなっている…」

「様子がおかしいって？」

「鳴き(異常呼吸)がひどいんだが、それだけじゃない。餌は喰わないし、死ぬものも出ている。これから、どれだけ死ぬか分からないんだ」

「死ぬんですか…?!」

鶏太には場長たちの不安が手に取るように分かる。それは、彼自身の不安でもあるのだから。一巡した鶏太は、帰途の車中から携帯電話で専属の飼料運搬者へ連絡をとった。《本場への餌は、単独便で輸送すること。止むを得ない時は、最後に本場へ搬

入すること。本場に出入りした時は必ずバルク車を洗浄し、さらに消毒を実施すること》を徹底させるためである。また運転手は、鶏太を除けば会社外の人間と接触する機会が最も多い。迂闊なことを喋っても具合が悪い。そのためには、運転手に今起きていることを認識させる必要がある。とはいえ、運転手は鶏のことに詳しいわけではない。不用意に説明することもかえって不安を招くであろう。

鶏太はかいつまんで説明した。

「先日本場に入れた大ヒナがあるよな。あのヒナはこれからちょっと問題になるかもしれないよ」

「どうして？」

「餌の喰いつきが滅法悪いんだ。なんか持ってるかもしれんな。まあ、あんまり心配することはないと思うがナ」

「明日の餌は入れるんでしょう」

「予定程には減ってないと思うよ。余ったら隣の鶏舎のタンクへ入れてくれないか。それから、餌工場へ行っても、余分なことは言わないようにナ」

「分かりました」

とりあえず、明日のことのみを伝えた鶏太は、『細かいことは明日に詳しく手配しよう』と心に決めて、戻った彼をさらに驚かす出来事が本場に待っていることを鶏太は全く気付かなかった。

大ヒナの鶏舎へ戻った鶏太に、担当の少年が言った。

「社長、俺、あんまり心配なので、いつもの保健所のS先生に電話したんです。先生はいつも遅くまで仕事してるって聞いたから、まだ間に合うかと思って。明日の朝、一番に来てくれるそうです」

「何だって!!」

「まずかったですか？」

「う～ん」

少年が一途に心配していることを肌で感じる鶏太は、自分の判断を待たずに家畜保健所へ連絡した彼の行動を叱ることができなかった。

『そういえば、今年の春、AIの淘汰と補償に関して具体的に決まったナ。確か補償金額も決まっていた。淘汰したら、羽当たり八〇〇円だったと思ったが…』

それを思い出した鶏太は「よく気が付いたな。ご苦労さん。明日も大変だから、帰りなさい」と少年を労って言った。時計を見ると、すでに十時半を回っている。少年は、長い一日の労働を終えて戻って行った。

鶏太は、《この若めすが鶏ペストと呼ばれる、高病原性のAIであった場合にどのような経過を辿り、経営自体にどのような影響を与えるものか》について考えを巡らせた。

著者注

●このシミュレーションは、わが国の行政におけるAI対策が実際にAIの発生を見ないうちに、米国のそれに準じた基準ですでに完成しているものとして行った。

●米国におけるAIコントロール対策には、この考察にもあったようにいろいろな形で紹介されているものと、実際の野外における受け止め方にかなり大きなギャップがある。この事実は、わが国において、AI対策を行う上で充分に理解し、考慮されねばならない。以下に弱毒H5、H7を含むいろいろなケースをシミュレーションしてみたい。また、米国の採卵業界で実施されているAI対策の実態にも触れることができれば…と考えながら筆を進める次第である。

（つづく）

（筆者：㈱ピーピーキューシー研究所代表取締役社長／農学博士・獣医師）

好評発売中

2000年版

日本養鶏関係者名簿

中央団体、特殊法人、中央官庁、都道府県、大学、関連会社、採卵（飼養羽数１万羽以上）・ブロイラー（年間出荷羽数10万羽以上）生産者等の養鶏関係者をすべて収載

〈発行：㈳日本養鶏協会〉

Ａ５判　680頁　定価13,000円（〒・税共）

〈振替　０８４０－０－５８４７１〉

申込先　㈱鶏卵肉情報センター　〒467－0827　名古屋市瑞穂区下坂町１－24　ＴＥＬ052(883)3570㈹　ＦＡＸ052(883)3572